

# 縄張り図（地形観察図）

～岐阜県古代・中世寺院跡総合調査から～

調査課 櫛田 尚人

考古学コラム「きずな」NO.24

令和3年9月1日

岐阜県文化財保護センター

## 〈はじめに〉

私の休日の楽しみは各地の城跡に行くことなのですが、毎回準備するものがあります。それは「縄張り図」と呼ばれる略測図です。これは、城の各施設の配置を示した図で、城の全体構造を分析するのに有効なため、各地の城郭調査で作成されています。最近は観光用のパンフレットなどに掲載されることもよくあります。

さて、岐阜県文化財保護センターでは現在「岐阜県古代・中世寺院跡総合調査」という寺院の調査を行っています。この調査で「地形観察図」という略測図を作成しているのですが、これは城郭調査の縄張り図を寺院の調査に応用したものです。今回はこの縄張り図（地形観察図）の書き方や作成する意義について紹介します。

## 〈縄張り図の書き方〉

縄張り図の書き方は、作図者によって少しずつ違うのですが、ここでは『発掘調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課監修 2013）を参考に説明します。

### （1）準備

簡易測量計、方位磁石、方眼紙、画板、定規、筆記用具を用意する。

### （2）測点の記入

計測を始める基準となる点を方眼紙上に記入し、測点とする。

### （3）単点の計測

遺構の上端と下端の位置を計測して作図する。まず作図者が測点に立ち、地図の北と実際の北が合うように方眼紙を固定する。次に測点から計測の対象となる地点（単点）まで距離を測定し、地図で単点の方向に縮尺に応じた長さを取り、単点の位置を落とす。



【簡易測量計で距離を計測している様子】

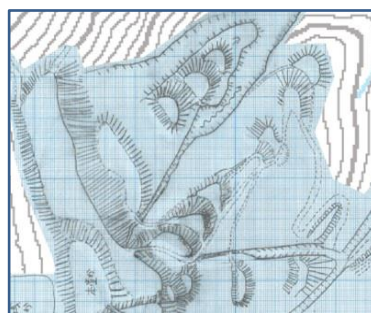
### （4）測点の移動

測点を順次移動して計測を繰り返し、対象となる範囲全体を図化する。

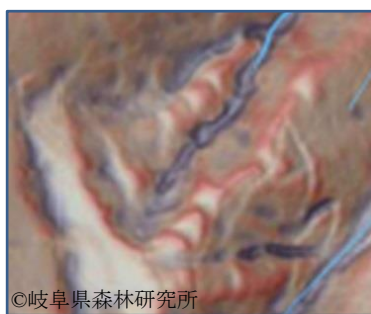
### （5）ケバの作図

高低差を表現するためケバを用いる。ケバは、上端から下端に向かって引く。

## （6）地形図への貼り込み



【完成した縄張り図】



【CS立体図】

（3）～（5）を繰り返し完成した縄張り図を、複写して同縮尺の地形図に貼り込めば完成です。

一般的な縄張り図作成はこのような手順になっていますが、現在私たちの調査では、「CS立体図」を積極的に利用しています。CS立体図とは航空レーザー測量のデータをもとに作成された図で、谷を青く、尾根を赤く塗り、傾斜角度によって濃淡をつけてあります。これを利用すると遺構の大部分がすでに表現されているため、（2）

～（5）の作業を効率よく行うことができます。

## 〈縄張り図作成の意義〉

本来は城郭の調査で使う縄張り図を寺院の調査に応用しているのはなぜでしょうか。それは縄張り図が全体像を表現することを得意としているからです。

近年、全国で寺院の発掘調査や詳細な測量調査が進み、貴重な成果が公表されています。しかし、公表されている調査成果の多くは伽藍の中心部に限定され、寺院全体の構造を明らかにできていません。その理由は、寺院全体の面積が広範囲で、すべての発掘調査や測量調査を行うには莫大な予算や時間が必要だからです。縄張り図は地表面観察のみで作成できます。すなわち縄張り調査は、低コスト・短期間で寺院全体の空間構造を把握することができるのです。

## 〈おわりに〉

縄張り図が低コストで全体像を表現できる一方、地中に埋まっている遺構・遺物を知ることはできません。また高さ表現も不得手です。失われた城や寺院の姿を知るためには、縄張り図だけでなく発掘調査、測量調査など様々な調査成果を合わせることが必要なのです。

## 〈参考文献〉

文化庁文化財部記念物課監修 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』、同成社